巻頭言

理療科教員と理療科教員養成の喫緊の課題とは？

筑波大学理療科教員養成施設長
緒方　昭広

2020年のオリンピック・パラリンピックを迎えた早々に、新型コロナウイルス感染が広がりはじめ、たちまち日本はおろか、世界各国で感染が拡大し、前代未聞の緊急事態に政府機関をはじめ、多くの感染対策機関が対応に振り回されている。また、この騒然たる危機に輪をかけた、根拠のないデマが横行し、国民が翻弄され、トイレットペーパーなどが品薄状態となった。国民の冷静さを失った行動は、それ以外の者に大きな悪影響と困惑を引き起こしている。しかし、それが人間の実際の心理行動なのかも知れない。

この国の緊急事態に国民が正確な情報を選別し、冷静に判断した行動を採り、協力して速やかな感染収束を図る必要がある。

この紀要が発行される時は収束していることを願わずにはいられない。

本施設では、オリンピック・パラリンピック期間中にマッサージのボランティアを計画している。本施設の教職員をはじめ、近隣の盲学校の教員を募り実施する予定である。場所は本施設の部屋を利用し、オリンピック・パラリンピック期間中に活動するボランティアならびに役員などの方々を対象としている。

次に、本施設の受験者は20年以上前から徐々に減少し、その減少幅は、この数年とくに著しい状況である。卒業時の求人率をみても、盲学校（視覚特別支援学校）への正規教員の求人減少はもとより、任期付き教員の公募が4～5年前から増加している。正規採用求人が公募されても既卒業生で任期付き採用の教員がその公募に殺到し、新卒の学生の正規採用は厳しくなっている。また盲学校では２月後半から３月にかけて２次、３次の入学試験を実施して、何とか生徒数を確保しようと努力されている。そのような中で、1人の入学者が出てきた場合は、1人のクラスができて任期付きの教員が必要となる。しかし、機械の部品ではないので、ストック要員（施設入学者）を増やして対応することは簡単にいかない。

このような過渡期の対応は、現職教員に少し負担が増加するが、協力して乗り越えてもらうことも必要と考える。また、現職教員は危機感を持ち、地元の大学入学者が増加（前項の大学に障害者が約860人在籍、学生支援機構）している視覚障害者に接する機会を捉え、卒業後の進路

として広報していく必要があると考える。学校長をはじめ取り組んでもらいたい事業と考える。

本施設にあっては、入学者はほとんど盲学校（視覚特別支援学校）からの受験者であるが、盲学校現場の声を聞くと、視力のある教員が必要との声も学校長から聞いている。課外活動や研修旅行などの生徒引率、事務的作業の補助、授業資料の作成など多くの場面で視力が必要とされる機会は多い。本施設としてもそのような現状を踏まえ、一定の制限を設け、これまで以上の晴眼者の入学者の比率も再検討していく必要があると考えている。また受験者、入学者の減少を考え、このような状況の中でも、より発展的なことは施設のあるべき姿として進めていく必要があり、今後他施設との共同的な取り組みも模索していかねばと思われる。

本施設の卒業生（現職教員）をはじめ、施設の教職員、全国盲学校長会、文部科学省、その他本施設の運営に関心のある諸先輩の皆様の忌憚ないご意見をうかがえればと思います。

令和３年３月吉日